

[研究ノート]

八ヶ岳南麓高距山村清里の変貌

山口 源 吾
仲 川 信 一

- <目 次>
- 1 はしがき
 - 2 戦前の清里
 - 3 念場原の開拓
 - 4 休養観光集落清里
 - 5 観光集落へと変貌の素因
 - 6 終わりに

1 はしがき

清里は八ヶ岳火山列の南東麓に位する高距山村である。1950年以前の旧清里村は山梨県下屈指の貧弱小村で、戦後住民は都鄙生活水準の較差是正のために種々の努力がなされた。

古くは高距自給穀作農業集落であった清里は、終戦期の食糧不足克服のために開拓農村に、さらに土地生産性拡大の目的で、酪農集落に、経済の高度成長期に入ると観光休養集落へと住民の生活重心が変貌した。

現在旧清里村は山梨県北巨摩郡高根村の一地区となっているが、町内で変貌の著しいのは清里であり、中央道西宮線の全開通と小海線の利用によって京浜・中京との時間距離が短縮され、都市若年層の週末休養観光地としての色彩が濃厚となっている。

2 戦前の清里

(1) 村の起こりと生活基盤

高根町の青木遺跡の石棺群や下黒沢の湯沢遺跡は、岳麓の原野に採集経済を営んだ人びとの居住跡で定住集落のあったことが実証される。

14世紀の初頭、京都に左右馬寮が置かれ国内から朝廷に貢馬が行われた頃、甲斐国にはその直轄の牧監 柏崎・真衣野・穂坂の3牧があり、その1つの柏崎は旧檜山村（現西原・上手・東原）一帯の原野で、東南麓の波状丘陵地清里の念場原がその核心であった。岳麓で育成された良馬は年30頭が京に送られていた。

伝承によれば中世念場原に開かれた新田は人戸殷賑して念場千軒と呼ばれたが、その繁栄は牧馬に基づくものであったという。

15世紀末牧馬の中心が奥州に移ると牧者は四散し、その大部分は檜山・浅川に移住、ソバ・コムギ・ヤサイ等を作り、自給穀作の古村が生まれた。

念場原は江戸時代初期までは再びもとの未開拓の原野に戻り、乏水地域のため僅かに榎山・浅川から2～3の出作りが見られたが、平坦面は馬の調教場に利用されるに過ぎなかった。

明治22年(1889)榎山村と浅川村は合併して清里村となった。村の標高は1,000余m、年平均気温9℃以下の高冷地で耕地は火山灰土の瘠瘦地、米作は反収6俵という土地生産性の低さで、通婚圏も長野県千曲川上流の川上・小海等に限られていた。

大正年代(1919頃)の戸数は140、人口稀薄の無医村で、清里駅開設の昭和7年(1932)頃でも旧村榎山と駅との約8kmの間には農家1戸、駅前に4～5戸、下念場に4戸、大門川西部に10戸を数えるだけの淋しさであった。

昭和30年(1955)町村合併促進法で清里村の所属が決められる時、村は西隣の大泉村と村勢状況が同一なので二者の合併を望む村民が多かったが、単村間の合併では合併による地方交付金がないため、念場原や付近原野の草刈場で入会権を共有する高根村に合併することになった。

(2) 生活態様

旧清里村は榎山・浅川とも茅葺の寄棟造りの農家の散村で、集落の四周に散在する水田と畑地を持っていた。

農地改革以前は共に戸数約80戸の農村で、住民の約80%は小作農であり数名の地主層と飯米農家の自作農を除くと、村民の生活は苦しかった。主要生産物は米・マユ・木炭で、マメ・ソバ・コムギ・トウモロコシ・パレイショは自給用作物であり、坂畑の桑園に依存する養蚕と農閑期の製炭が主な現金収入の方法であった。

冬季の過剰労働力は男子は山林労務者となる者が多く、青年婦女子は終年信州の製糸女工として出稼していた。

昭和7年(1932)頃の不況時代には自作農でも耕地を抵当に勧業銀行から借金し、山林・田地証書を手放して小作農となったり、小作農中にも年貢の物納ができず、借地権(耕作権)を放棄して没落する者も現われた。

村内や隣接地域との交通も不便で、国道佐久街道は未舗装で1935年ようやく

韭崎方面から三軒屋までトラックが通ずるようになったが、そこから村内までは荷馬車しか通じなかった。こうして旧清里村は県内でも屈指の貧弱町村に数えられていた。

3 念場原の開拓

昭和10年(1935)頃、村人の中で地域開発を図り村発展の拡大策として念場原を県営で開拓しようとする企てがなされた。

ちょうどその頃東京市で上水道源小河内ダムの建設計画があり、ダム建設に伴う水没犠牲農家のうち山梨県北巨摩郡の山村丹波山の27戸と同小菅村の1戸が集団入植したいとの希望が出た。そしてここに八ヶ岳南東麓1,200mの高冷地に農村建設の端緒が開かれた。念場原一帯は恩賜県有林であり、清里・大泉・安都玉3ヶ村の入会地で、諸村が開拓受益者であるために、清里村は他の2村に開拓受益権放棄の代償として2,350円を支払って開拓権を独占した。

念場原は広大な火山碎屑物の輝石安山岩塊を含む泥流や凝灰岩質集塊岩の互層に、風成ロームの分解した黄褐色土が堆積した山麓原野で、標高1,000~1,600m、広さ21km²、その北東は野辺山原に続く乏水地域である。

昭和13年(1939)丹波山・小菅の28戸200名の開拓入植者により八ヶ岳地区の開墾が始められた。

(1) 八ヶ岳部落

入植農家は東京市の諸施策と援助のもとに良き指導者を得て一致協力新天地の開墾に努力した。まず八ヶ岳農事実行組合を組織して東京市から交付された播種用大豆・小豆・陸稻・玉蜀黍を試作しながら、ダイコン・キャベツ等の蔬菜類も試作し、それを甲府や大阪の市場までも出荷して現金収入の道を得た。

入植2年目各自の経営面積を1.5町歩に拡張し、最終標準目標を水田1反2畝、畑地2町5反として5ヶ年輪作経営を試みた。地下集水暗渠利用の開田4町歩も計画、乏水地域の高冷地水田経営を可能にした。

人びとは笹小屋住宅と呼ばれる仮小屋でランプ生活を営みながら、開拓部落

の精神的紐帯として墓地新設や仮診療所・分教場を設置、国庫助成で新住宅の建設、さらに共同作業所を竣工し開拓地神社も創設した。

こうして新しい村造りの基盤は確立した。第二次大戦の末期(1944~45)、県は食糧増産のために帰農隊を公募し、京浜方面の戦災者が54戸入植した。ついで終戦直後危機に瀕した食糧不足を補うための緊急開拓事業実施要領が公布(1945.8月)され、満蒙開拓義勇軍のんびと・戦災者・徴用工員・海外引揚者・浅川・檜山の増反農家の二、三男の希望者が入植し、大規模な自給新農村建設が着手された。かくして朝日丘・下念場・東念場・ハヶ岳に計100余戸の開拓部落が誕生した。

(2) 酪農集落清里

昭和28年(1953)ハヶ岳山麓が農林省から集約酪農地域に指定され、牧草資源の豊富な高冷山村清里はこの中に含まれていた。さらに「ジャージー地区」に指定されると、清里は植物分布から見て冷温帯南部のブナ帯と温暖帯北部のカシ帯の漸移地帯に当たり植物資源が豊富であり、粗飼料でファット(fat)量が高い家畜の放牧に好都合の所であった。

ジャージー地区に指定された同年、牧牛導入に有利な「国有牛貸付制度法」が施行された。この制度は国がオーストラリアやニュージーランドから輸入した牝牛を希望者に貸与し、その牛の出産した仔牛を政府に返せば購入費として借金した一定額は返還しなくてもよいというものである。これは開拓農民を刺激し、世界銀行からの貸入金に依存することのできないような零細農家まで牧牛に関心を持つようになった。

昭和41年(1966)さらに安価な輸入乳製品から酪農家を保護するために「加工原料乳生産者補給金等暫定措置法」が施行され、加工原料乳が安価となってその売渡金で牧者の生産費がマイナスとなる場合は、その不足分を政府が補助金として生産費に与えるというものである。

こうした生産者保護奨励は生産意欲を刺激して牧牛は増大した。

昭和25年当時土壌改良のために飼育された黒牛・緬羊は僅かに10数頭で、その後乳牛の導入されたのは27年からである。牧牛拡大の趨勢は表2-1の通

表 2-1 高根町の牧草地
の拡大

S. 40	45	50	55
64.0ha	27.5	111.8	102.6

(農林業センサス)

表 2-2 高根町の常住人口

年次	世帯数	人口総数	比率
S.22	2,255	12,044	100%
25	2,178	11,701	97
30	2,081	11,000	91
35	2,065	10,481	87
40	2,067	9,659	80
45	2,083	8,331	69
50	2,135	7,968	66
55	2,238	7,895	66
59	2,361	8,360	69

りで、牧草地の拡大率は10年間に実に373%に及んでいる。

当時の開拓農家100余戸のうち酪農家は80戸に達し、専業酪農家5戸は平均5ha以上の耕地を持ち、後に観光産業の盛大型に入ると乗馬牧場や牧場民宿経営者となる富を蓄積した。酪農部落の生活水準は旧村地区と同格となり住民の間に階層分化が見られた。

昭和54年(1979)全国的に生乳が生産過剰になると政府は牛乳の生産調整を行って、各地区の生産量を制限した。

出荷量の減少は零細有畜農家に経営の危機をもたらした。経営資金の不足は生産費のコストダウンのための集約的機械化を困難にし、離農者・転業者が生じていった。

4 休養観光集落清里

(1) 旅館業の発達

旧清里村は自給穀作農業集落で米作と養蚕それに木炭製造に依存し、山林労働者や木炭の搬出駄賃等の収入だけでは生産年齢層の離村流出を止めることは

概念図 清里の観光産業



できなく、過疎化現象が起こり、自給農業だけでは低暖地域との生活水準較差が開くばかりであった。

旧清里村は戦後40年間のセンサスを見ると、後に合併した旧高根を合わせた総数でも人口は著しく減少していて、昭和22年(1947)に対する昭和55年(1980)ではその比66%である。

こうした時、地域の指導層である地主や名誉職の人びとの間に国民休暇村を起こし、村の振興を図ろうとする考えが生まれてきた。

昭和48年、その頃八ヶ岳登山者等に宿を提供した経験から民宿を始める者が現われた。動機は利潤追求という経済的な目的よりもむしろ、地域社会の発展と共に後継者を養成し郷土愛まで受け継がせようとする精神的側面も重視されていた。自宅の部屋を提供し自作の穀類野菜で都市の学生等に山村生活を経験させ、時にはアルバイトによって勤労精神を養い、家族との交流によって相互に視野の拡大をも図ろうとするものであった。そしてこの考えは後続の民宿経営の組合員にまで引き継がれている。

一方、開拓農家の中にも開拓目的に到達し自作農となり広大な土地を所有し、生活水準も既存農家と同格以上となった者は民宿に転業し、あるいは牧場経営と民宿を兼ねる者も現われた。これらの人びとは農牧で生活の基礎を確立しているから民宿経営には不安がなかった。以上の民宿経営者はほとんどが第二種兼業農家で収入の70%はいわゆる観光産業に依存している。

次に清里地区のペンション経営は昭和53年(1978)に始まっている。ペンション経営は旅館法により室数・割烹施設・衛生防災施設等に民宿より制約が多いので開店には多大の資金を要する。

経営者の過半は都会からの企業関係停年退職者・学者・旧軍人・旧公務員で、一部にはペンションをセカンドハウスに使用する者もある。彼らはこの地域に広く文化を導入しようとする意識を有する経営者が多い。

敷地200～250坪、建設費等7,000万～1億円の固定資本は自己資金で賄い、経営に強烈な利潤追求は考えていない。したがって接客も家族的で青少年にはマナーの精神的指導も考慮している。

一方、都会からの第二次外来者である青年経営者は建設資金の約半分は数戸

の不動産業者やペンション組合からの借入金で賄う。借入金に対する利息年1割、300万円の返済のためには高度の経営能力が必要である。労働分配率5.5名、キャパシティ25～30%として、室数5～7、年粗収入2,000万円、利益20%としてはじめて経営が可能である。

一般に開拓農牧者や年金生活者の経営は順調であるが青年層の他人資本による者は回転率の大きな経営をしないかぎり存続は困難である。すでに駅前地区ではその事例2～3件を見ることができる。

(2) 清里の現況

岳麓高冷地清里地区は昭和50年(1975)以来急激な発展をした。いまそれを数値で示せば次の通りである。同年における高根町の世帯数は清里を除外して1,731であり昭和59年(1984)は1,815で、その間の増加率は5%である。これに対応する年次の清里地区の世帯数は423:546で増加率は29%で他地区を遙かに凌いでいる。

現在、旧清里村を構成していた檜山・浅川は過疎化がすすんでいるので、この高い増加率は念場原開発によって生じた駅前・朝日丘・下念場・東念場の開拓部落の増加発展を示す指標となる。

駅前地区はこの発展の核心で特にここ数年ペンションは爆発的に急増している。

小海線開通当時清里駅の南部は耕境にあり、駅前には僅かに4戸の民屋が認められるに過ぎなかった。昭和18年(1943)駅付近には旅館3軒・郵便局・共同販売所など計18戸程の人家があった。そしてその南方に念場原の新開拓地が展開していた。

いま(昭和59年)ここに民宿45、ペンション84、旅館等12、タクシー会社5、土産物店29と飲食店52が櫛比している。

観光客の数は流動的で7～8月にピークがあり1～2月にシーズンオフがある。

旅館業者の接客法は入込観光客の定住地の県民性にも関心が必要で、清里駅でその最盛期降車人員数を調べると表2-4のごとくである。

表 2 - 3 清里高原観光客入込状況調査表

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
S.55	213	213	—	323	618	955	2,690	3,610	750	672	217	213
56	134	118	271	274	1,090	463	5,107	5,461	842	508	302	112
57	67	67	249	262	1,016	488	4,252	6,009	1,246	897	224	62
58	164	104	679	473	1,041	583	4,680	6,754	1,436	1,016	331	224
59	183	95	575	532	1,182	662	5,344	7,532	1,864	1,269	348	267

注：入込数は延数，単位百人(高根町観光係調べ)

表 2 - 4 1985年7月清里駅管区別降車人数

管 区	1～10日	11～20日	21～31日	計	比 重
東 関	1,319	2,546	6,017	9,882	32%
山梨・静岡	758	1,297	3,163	5,218	19
名 古 屋	252	611	796	1,659	5
関 西	112	598	538	1,248	4
新潟・金沢	26	37	119	182	—
管 内	1,866	2,541	8,159	12,566	41
そ の 他	14	82	65	161	5
計	4,347	7,912	18,857	30,916	100

すなわち中央東線の地域からの観光客は時間距離2～3時間の到達度にある客が90%を占め、関西・中京方面からは約10%である。これは清里駅前地区の観光都市景観が関東——京浜地方——に類似することの主因である。

清里地区は以前の生活形態上の均一性が崩壊しつつある。旧村檜山・浅川では過疎化が進行し、念場原開拓地は観光産業で住民に量の増大と質的变化が起こっている。量に関しては高根町がここ9年間の増加率がマイナス1%で停滞あるいは減少しているのに対し、観光集落化した清里は9%増加している。また質的变化は開拓農民→牧者→観光業者へと変化は大きい。

駅前に代表される都市景観は色彩と形態で、モダンなペンション、廉価で小型な商品の並ぶ土産店、周辺の牧場民宿、土日の若人の雑踏は大都市の盛り場と変わらない。

5 観光集落へと変貌の素因

(1) 自然的要素

観光集落としての清里はどのような自然的立地要因を持っているのだろうか。

a) ハヶ岳火山列の浸食山稜と岳南麓の温冷両植物区の多彩な植物景観は都市居住者の懐郷の念を満足させる。

b) 年平均気温8.6℃、年雨量1,100余mm、量暖月の平均気温20℃、最寒月の平均気温は-3.1℃という冷涼気候は避暑地・学生村・休養別荘地の立地要因であり、駅前観光街村の立地に役立って、国道141号沿線や東原区東部の山麓には10数戸の別荘が建ち、なかには東京近郊から土来月帰の家族まで見受けられる。

(2) 文化的素因

c) 多くの史蹟景観は青少年の教養文化の吸収に役立っている。青木遺跡の石棺群や湯沢遺跡の居住跡、武田氏の墓跡、巫女の舞の行われる金毘羅神社、古

仏群の海岸寺、その他各小字に立座する 1,000 余体の石仏石祠がこれである。

(3) 文化施設と優れた指導者

d) 住民の教養や社会活動のための諸施設は個人はもとより集団宿泊者（ゼミナール、学習者等）の教育施設ともなる。

キープ教会の施設の一つである清泉寮では北欧的な農山村気分を満喫することができる。また町民グラウンドや山村体験宿泊施設も有効で都市と山村の青年の交流も深めている。

また村造りに良き指導者を得たことも集落の変革発展に貢献している。鉄一丁から始まった開拓事業が成功し今日清里発展の基を礎いたのは、八ヶ岳開墾事業所長安池興男の献身的指導による所が大きく、彼は開拓民の農耕指導から住宅・学校・神社・墓地・共同作業場の建設まで指導し、時には私費を投じてまでして事業を完遂させたのである。

またそれ以前にも清里の村造りに貢献した米人ポール・ラッシュ⁽¹⁾の功績も忘れられない。氏は 1,400 m の耕境に農業試験場を設立し、村民の農業教育、医療、宗数方面での貢献は大きく、青年の清里農業センターを訪れる者は多い。

6 終わりに

(1) 生活基盤の二極分解

高根町の農村地区と観光地区の富の程度を比較するために昭和 54 年と 60 年の各地区の納税者 1 人当たりの平均固定資産税を計算すれば表 2-5 のごとくである。すなわち町全体の納税者平均は 2 万 951 円であるのに対し、旧清里の浅川・樫山の平均は 1 万 7,332 円と低く、念場原開拓から生れた観光地区（念場原）では 6 万 1,985 円で 3 倍以上の負担力である。さらに本年度（昭和 59 年）旧清里村の既存集落では 5,664 円に対し開拓地区では 1 万 4,604 円で 2.6 倍の負担力を示す。これは駅前付近が最近坪 30 万円の地価で示されるように観光業で発展し、旧農村部が坪 3～6 万円であることにも依るが、旧清里村の既存集落

表 2-5 固定資産税負担力

地 区	税 額		納税者	
	S.54	S.60	S.54	S.60
高 根 町	73,329,000円	184,462,160円	35,000人	39,293人
（ 浅 川	477,100	759,090	28	36
旧 東 原	462,570	902,290	36	35
清 式 手	673,600	1,279,660	29	29
里 西 村	813,210	1,826,260	37	34
） 平均	17,332/人	5,664/人	計 140	134
八ヶ岳	1,579,150	7,982,590	32	60
（ 下念場	877,220	4,291,660	25	39
念 駅 前	6,621,300	17,051,170	62	69
場 東念場	523,770	2,843,030	27	38
原 朝日立	1,114,030	4,185,470	26	42
） 学校寮	8,000	9,980	1	1
平均	61,985/人	14,604/人	計 173	249

(高根町役場調べ)

と観光集落と化した念場原とに生活基盤が二極分解したためである。

清原地区の急激な発展にはここ1～2年国鉄降車人員数の減少という危惧が現われている。これはレジャーブームに対するテンポリテートのためかも知れないが、これに対しては将来の発展を希求した先行投資が始められている。

(2) 先行投資

観光投資の開発はすでに計画着手されたものがある。

学校寮地区は清里駅の北々東、標高1,350～1,400 mに位する恩賜県有財産区の一部を、土地高度利用条令に基づき清里財産区念場山組合が借用したもので、200 haの林地に大学寮・都市営寮や地域住民の保養施設を置こうとするものである。

また山梨県企業局と林業局とでは駅の北部に「清里の森」の開発計画があるし、下念場には、丘の公園を開いてレクリエーションの場とし、さらに野辺山と清里の村境には「清野辺の山」の名で民間投資によるレジャーセンターの建設が昭和 62 年（1987）を目標に図られている。

冬季スポーツ場としては美しの森の北方 1,900 m の高度付近に県営スキー場があり、野辺山スキー場と共に人工雪による補強が企てられている。

観光を含む多目的ダム⁽²⁾の建設は現在すでに浅川部落の西部、大門川と川俣川の合流点近くに昭和 61 年完成を目標に進行中である。

高冷山村清里は長年月の間に幾度か生活態様を変化させて今日に至った。採集経済—牧馬依存の村—自給穀作農村—開拓集落—休養観光村へと。

今日の目覚ましい観光産業への発展は人びとの自然環境への努力的な適対応の結果と誠実な指導者の存在と高度経済成長というテンポリテートの結果と考えられる。今後の盛大はこの上に経済政策と精神面に良好な政治的因子が働くことが必要である。

本文作成にあたり清里村の起こりと最近の旅館業についてお話しいただいた旧清里村浅川の藤原智典、ハヶ岳地区の民宿組合長根津吉夫、朝日丘のペンション組合長小沢一雄の三氏と、高根村役場でお世話になった住民、税務、観光係の方々へ深謝の意を表します。

〔注〕

- (1) ポール・ラッシュは米国ケンタッキー州に生まれ、終身独身であった。戦後マッカーサーの司政下、民間情報局長として来日したが敗戦後の日本国民を救うために退官し、昭和 23 年（1948）清里に教会を設立。食糧の増産と村民の健康増進、布教に着手した。同 25 年農村診療所（セイロカ病院分院）を設立村民の診療にあたった。耕境で野菜栽培と酪農に成功。米国内での特殊寄付によって清里農学校・農業試験場を開設、市価の $\frac{1}{3}$ という低廉なバザールを開いて村民の農業教育に貢献し生活の向上に役立てた。

昭和 35 年（1960）協議場と聖アンデレハウス完成、その後青少年や学生用のキャンプ場も加えて再建した清泉寮は宿泊・勉学・勤学体験の場となっている。同 55 年高根名誉町民となったポール博士は没した。

- (2) 大門ダム。大門川の下流須玉川・塩川の沿岸は明治 15 年 (1885) をはじめ何度かの台風に伴う大水害にあった。このために治水対策として大門川総合開発事業として多目的ダムの建設計画が進められた。以来長期にわたって調査研究、その結果洪水調節・流水の正常機能維持・上水道用水の供給・人工自然美形成のための重力式コンクリートダム (堤高 65.5 m・総貯水量 360 万 m^3 ・有効貯水量 250 万 m^3) の建設に着手、昭和 61 年 (1986) 3 月完成。

〔参考文献〕

- 三原和夫訳・スイス山村の開発調査事例——ヴァレー州ブリュツソン——, 山村振興調査会, S. 44.
- 山崎直方: ハヶ岳火山彙地質調査報告, 震災予防調査会報告第 20 号, M. 31.
- 東京市役所: 小内貯水池郷土小誌, S. 13.
- 高根清里小 PTA 報道部: 清里のはなし, 第 1 集プリント.